24. 二本のオリブの木と二人の証人

歴史観、キリスト観が入っていないと上級は難しい。
黙示録 11：1～6
わたし＝ヨハネ
はかりざお＝御言葉
異邦人は裁かず、そのままにしておきなさい（罪刑法定主義）。ノアの時代も同様。御言葉という法で裁く。
植物は人だと習ったが、二本のオリブの木とは？
ゼカリヤ 4：11～14
二本のオリブの木とは、二人の油注がれたもの＝神様から使命をもらった人。使命をもらうとき油を注がれた。
黙示録 11：4～6
二人の使命者
麻布でなく荒布であるのは中心者のもがきの心情から
ヤコブの手紙 5：17
エリヤはわたしの言葉のないうちには雨が降らなかっただろうといった。
※二本のオリブの木の一本はエリヤ

出エジプト記 7：17～21
エジプトの 10 の災いのひとつは水を血に変えた。
※二本のオリブの木のもう一本はモーセ
モーセは外的に人々をエジプトから導いた。⇔エリヤは内的に人々を偶像崇拝から立ち直らせた。
∴外的・内的のペアをたてた。

イザヤ書 34：16
連れ合いを欠くものは無い。
万物もペアがある。
伝道の書 4：9～12
ふたりはひとりにまさる。１＋１＜２だといっている。二人がひとつになると力倍増。二人が争うとダメージも倍増。
申命記 32：30
一人で千人、二人で万人。二人で二千人ではない。二人で多くの命が生まれる。
マルコによる福音書 6：7
十二弟子が伝道に二人ペアで遣わされた。片方が倒れたらもう片方がおこす。

一人は時代を切り開く人、もう一人は時代を完成させる人。
モーセは肉的に導き出し、エリヤが霊的に準備した。
モーセは開放の歴史の開拓者、ヨシュアは開放の歴史の完成者。
モーセは旧約時代の使命者（肉的な律法）、イエスは律法を引き上げ、霊的な律法に。
バプテスマのヨハネ（イエスを証する肉的な使命者）とイエス（救いの御言葉を伝える）はひとつにならなくて、イエスは自分で自分の証をしなくてはならなくなり、迫害が激しくなった。
ルター（免罪符など堕落していたカトリックを変えるため、宗教改革）とカルビン（プロテスタント）がひとつになって、再臨主が来る準備を行った。
初臨主（イエス）と再臨主（イエスでは成し遂げられなかったことをする）もオリブ。
再臨主を証するのはその御言葉を聞いた人。御言葉を聞いた一人一人がバプテスマのヨハネである。
イエスが成し得なかった歴史観が無いと最後まで走れない。
カトリックとプロテスタント。より旧歴史が新歴史を導かなければならない。
Ｓ極N極、男と女、…科学的にもある。
二本のオリブを探さないといけない。外的・肉的のどちらが偉いというのはない。お互いのことを良く知って価値性を悟らないといけない。
ユダヤ人とイエスはひとつになれなかった。今は再臨主、神様とひとつにならないといけない。
オリブとひとつになったとき歴史が起こる。
出エジプト記 13：17～22

旧約	新約	成約
モーセ／エリヤ	ヨハネ／イエス	人類／再臨主
雲の歴史（律法）	火の歴史（御言葉）	
雲→水→良心	御言葉＝火	
肉の歴史	霊の歴史	霊・肉共の歴史

御言葉を聞いた一人一人がどうするか。二本のオリブの木に神様の歴史の本質が隠されている。いくらキリストでも一人ではできない。はっきりわかって再臨主を証しないといけない。